

啓蒙 9 9 の狩人が発狂
しているのは間違っ
ているだろうか

ケツに腕を突っ込んで魔石を引き抜
く変態

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

A：間違っていないがオラリオにしているのは間違っている

目次

啓蒙99の狩人が発狂しているのは間違っているだろうか	1
つまらないものは、それだけでよい武器ではあり得ない	18
知ってるもの。夜の次は朝だつて	32
異端の鍛冶師は狩人の夢を見るか	47

啓蒙99の狩人が発狂しているのは間違っているだろうか

エイナ・チュールはギルドの受付嬢だ。

ダンジョンに挑む冒険者たちのため、日々せっせと働いている。

今日も一人でも多くの冒険者が無事に帰るよう、張り切って受付に立っていた昼下がりに。

彼女の、いやギルドの頭痛の種は入り口を蹴破って現れた。

「ヒヤハ、ヒヤハッ！ ヒヤハハハハハハアーツ！」

突然の事態に何事かと視線が集まる中、ソイツは狂笑していた。

分厚い聖布を赤々と汚す大量の返り血。

装備者の理性を疑う金色三角のイカれた兜。

極めつけは肉片がこびりつくどデカイ車輪。

誰が見てもまともではない、狂人の類がそこにはいた。

「私はやりました、やりましたぞ！ 穢れた怪物共を、潰して潰して潰して、ピンク色の肉塊に変えてやりましたぞ！」

姿を変え言葉を変え、好き放題やりまくっていた。

ギルドは頭を抱え、冒険者は新人の手荒い歓迎がわりにソイツと接触させ、神々は爆笑する。

オラリオの人と神は、愉悦と嫌悪と興味と諦観と快楽と呆然と称賛と畏怖を携え。

いつの頃からか、ソイツを『頭のおかしいアイツ』、もしくは『関わってはいけないあの人』。

——あるいは「狩人」と、呼ぶようになった。

＜ ● ＞ 99

ベル・クラネルは新人の冒険者だ。

ダンジョンに出会いを求める、そんな青臭い夢見がちな考えでオラリオに来た。

そして本当にダンジョンで一目惚れをしてしまった少年は、今朝出会った街娘のすずめで『豊饒の女主人』という飲食店を訪れていた。

美人の従業員にドギマギし、値段に驚倒しながら食事をしていると——ギシィッ！

と、やけに重苦しい床の軋む音が店内に響く。

びつくりしたベルが振り向くと、そこには黒い様相の男がいた。

薄汚れた首巻きを垂らす男だった。

なぜか目を包帯でグルグル巻きにした男だった。

普通に危ない抜身の斧を堂々と手に持った男だった。

男はギシギシと床を踏み鳴らして、カハアツ、と蒸気を吐き出した。

明らかにヤベー奴だった。

「むぐうっ!？」

あからさまに危ない男にベルはむせた。驚きで喉が詰まりかけ、ドンドンと胸を叩く。

え、なんで? なんであんな見るからに危なそうな人がこんな所に!?

混乱するベルを他所に従業員の一人が気付き、早足で男の下に向かう。

キャットピープル
猫

人の少女は元氣よく営業スマイルを浮かべた。

「いらっしやいませニヤー!」

「……匂い立つなあ……」

「ご注文はなんですかニヤー?」

「堪らぬ匂いで誘うものだ」

「いつものメニューですニャー？　かしこまりましたニャー！」

「えづくじやあないか……」

「代金は前払いとなっておりますニャー！」

「ハツハツハツ……ハツ、ハハハツ！」

「それでは奥の席へどうぞですニャー！」

え、なんで会話が成立しているの？

ハラハラ見ていたベルは従業員の少女に戦慄を禁じ得ない。男は男で懐から有り金を全部差し出し、促されるまま店内に入った。

カウンターの端にいるベルの、角を挟んだ隣の席へ。

「……………えつつつ!?!」

顔を硬直させるベルの横に男はドカリと腰を下ろす。そのまま首をベルの方へスライドさせ、ビビる少年にニイイと犬歯を剥いて笑った。

「……………貴様、狩人だな」

「はっ、えつつ!?!　いやあの、僕はそのつ!?!」

「ああ、ダンジョンは普通じやあない」

「えつつ!?!」

「……………躊躇するなよ。姿が見えたら、それはもう怪物……………そうでなくとも、やがて怪物と

なるのだからな……」

「そ、それってどういう……」

「ハハハツ、ハハハハハハハツ！」

「あ、あは、あはは……？」

男は言うだけ言つて、正面に向き直る。

なんなんだろう、この人。一体どうすればいいんだろう。

ベルが動揺しようしようか迷つてる間に、男は給仕された料理を無言で食べ始めた。

「ベルさん、その人の事は放っておいていいですよ」

「え、でも」

「その人はオラリオでも有名な話の通じない人ですから」

「そ、そうなんですな……」

「はい、そうです！　ですからその人のことはおいといて、私とお話しましょう！」

男のメニューを持ってきたシル・フローヴァに流されるまま、ベルはぎこちなく話し出す。

しかし男の存在感が強烈過ぎて、正直何を話したかまったく覚えていなかった。

「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシユタインに釣り合わねえ」

その声と同時に白い獣が走り去っていった。

【狩人】は気にしない。それは狩るべき獲物ではないのだから。

しかし頭を掻き毟る気色悪い咆哮の主は、どうやら酔っている。

酔っている——血に酔った獣。酔いは即ちそれにしか繋がらない。

ああ、ならば【狩人】はどうするだろう。悪夢を彷徨う【狩人】は、きつと己の遺志であろう言葉を吐く。

「獣、獣……どこもかしこも、獣ばかりだ……貴様も、どうせそうなるのだろう？」
「アアツ？」

灰色の獣を融けた瞳に捉え、【狩人】は立ち上がる。狩りを全うするために。

だが灰色の獣もまた獲物ではない。故にこのままでは保てない。

啓蒙が脳液を揺さぶる。【狩人】の世界が歪み、崩壊し、また立ち戻る。

斧はいっしか、杖となり。目を覆う包帯はバケツのような兜に取って変わった。

「ほう、面白い。連盟を敵に回すか」

「何を言つてやがんだてめえは。喧嘩売つてんのか？」

「ならばお前は獣だ！ 穢れた汚物というわけだ！」

「獣だあ？ ハッ、上等じゃねえか！ 口だけの雑魚がよお、文句あんなら来いよ！」

「ちよ、ベートお、やめた方がええで。ソイツに関わると面白、いやいやめんどい事なるからなあ〜」

「ロキ……面白がつてる場合じゃない。やめろ、ベート。その男は……」

「うるせえフィン！ 俺の喧嘩だ、指図すんじゃないねえ！」

軟体生物と小さな金の獣を無視して灰色の獣は咆哮する。ああ、うんざりだ。

そこらじゅう汚物ばかり。せめて耳障りな音を止めねば、「虫」で溢れ返ってしまう。

【狩人】は揺蕩う思考のまま、灰色の獣に殴り飛ばされた。宙を飛び、無様に転げ回る。

全ては夢、全ては悪夢。青ざめた血は途絶え、幼年期は終わりを告げた。

氣づけば立っているのは【狩人】で、転がっているのは灰色の獣だった。

「……ほうら、やつぱりそうじゃあないか。気色悪い「虫」が蠢いてるぜ……情けない糞袋野郎が……」

袋野郎が……」

周りの獣の喧騒が絶える。押し固められた息遣いが狩りへの誘いを芳醇に醸す。

どれもこれも獲物ではない。歪んだ夜をひとしきり笑った【狩人】は、灰色の獣に儀式を施す。

式を施す。

仰向けに倒れる獣の顔に、たつぷりと真珠ナメクジを塗りたくった。

途端、軟体生物が触手を吹き出し、腹を抱えて交信を始める。他の獣共は一様に灰色

の獣から遠のいた。

受付に寄りかかって尋ねてくる「狩人」に、エイナは鋼の笑顔で対応していた。

「狩人」はよくギルドに来る。特にダンジョンに潜った後は必ずと言っていいほどだ。しかも血塗れで来る。粗暴な冒険者相手とはいえ、いやだからこそ清潔を第一とするギルド本部を「狩人」は容赦なく汚していく。

掃除は勿論ギルド職員の仕事だ。だからギルド職員は「狩人」が露骨に嫌いである。人の良いエイナでさえ冷たい鉄仮面を被る。

最初はそうではなかった。長年ギルドを悩ませる頭痛の種をエイナは解決しようとした。

しかし来るたびに仕事を増やし、大抵の場合奇行を繰り広げる。

この前のただ発狂して戦利品を投げつける程度ならかなりマシな部類だ。虫を出しては延々と踏み潰したり、得体の知れない汁を撒き散らしたり、「合言葉は？」と言ってギルドの入り口を塞がれるより全然マシだ。

ひどい時は何日も何日も柱に頭を打ち付けぶつぶつと呟いていた。柱は折れ、やたらめつたら多い「狩人」の血がコンコンと汚し続けた。

冒険者に『処理』して貰わねば今もそうなっていたかもしれない。笑顔を貼り付けるエイナは「狩人」と事務的に向き合っている。

とても澄んだ瞳だった。軽装にトップハットの「狩人」は脂ぎった中年の髭だらけの

顔から幼い少女の美声を吐き出し出ている。

その瞳もまた無垢な色を宿していた。きつと悪気はないのだろう。【狩人】はただ純粋に疑問を問いかけているだけなのだろう。

「ピチャ、ピチャ、ピチャ……チュパ、チュパ、チュパ……」

そのまま肩に担ぐ得体の知れない骨の塊をしやぶりだす【狩人】を見てエイナは思った。こいつは間違いなく狂人であると。

深く考えてはいけない。過去、【狩人】を理解しようとして日常生活を送れなくなった哀れなギルド職員がいる。「ちあきら」なるものに囚われた職員は異国の空の下、今も地底を掘り続けているのだろうか。

止めるべき思考だ。ただ受付嬢として無心に相手をすればいい。【狩人】はその内いなくなる。それをなぜか一番多く絡まれているエイナは経験則で知っていた。

「ねえ、あなた。海の音は不思議ね。嵐のようで、雨のようで、でもゆつくりと、滴るように、私の底から響いてくるの……私の底から、やってくるの……」

でもゆつくりと、滴るようにね……」

「そうですね。それは良かったですね」

エイナは自動人形のように言葉を返し続けた。やがて飽きたのか、【狩人】は「ちよろり、ちよろり」と呟きながらふらふらと外へ出ていった。

無論、血塗れだったのでエイナの受付台とそこに至る通路は全て汚れ切っている。鉄仮面を保つエイナは、ドン引きしているミイシャに気づかないふりをして黙々と清掃にとりかかった。

ギルドを出た【狩人】は晴れ渡る空を見上げた。

全ての真実を見通す【狩人】の瞳も、ずっと夜にあるわけではない。日が昇れば蒙^{もう}は啓^{ひら}き、見える一面も変わってくる。

獣の行き交う雑踏に紛れ、時折過ぎる軟体生物を記憶する。近しく遠く、決定的に違いながらそれらと【狩人】は似通っている。

いつしか疎通を為す日も来よう。彼らの腹を抱え転げ回る独特の交信が、【狩人】の耳に届く日が来るのなら。

紐を胸の辺りに通す軟体生物から得体の知れない何かを潰し潰し潰し潰し衣をつけて揚げた物を買った【狩人】は、唾液ではない粘液を分泌する舌先で脳喰らいのように摂取した。

「あ、あのおく……」

そうしていると、不意に獣の鳴き声が背骨を這い上がった。見れば、いつしかの白い

獣が恐る恐る近づいてくる。

【狩人】はジュールルルツと病巢のような物の内部を吸い取り、側だけになった衣を包み紙ごと咀嚼した。そしてさつきより三步ほど遠い距離にいる白い獣を見つめる。

「あ、あの、貴方が『豊饒の女主人』で僕の代わりにお金を払ったと聞いて……その、も、申し訳ありませんでした！」

白い獣が腰を折る。頭を下げる行為は突進の前触れだろうか。しかし、この獣は狩りの対象ではない。無視しようとする、白い獣は袋を差し出していた。中身はおそらく硬貨である。

【狩人】は思い出す。名状し難い臓物の山を差し出す獣血の主は、【狩人】の硬貨を時に食い逃げの補填にすると。獣が対価を払うなど片腹痛いことだが、ここではそれが尋常だ。

だから、【狩人】は受け取らなかつた。元より悪夢に住まう精神には不要なもの。少しばかり押し問答を繰り返して、白い獣ははたと思ひ出したように鳴き声を上げる。

「あ、そうだ。今更なんですけど、僕はベル・クラネルと言います。その、貴方のお名前はなんて言うんですか？」

名前、名前。獣の咆哮を完璧に理解する【狩人】の耳は、それを聞いて少し止まった。あつただろうか、なかつただろうか。【狩人】には名乗るべき多くの名前がある。その

どれを名乗るべきか。

聖剣の英雄か、最初の狩人か、狩人狩りの鴉か、時計塔の死者か、悪夢の主か、はたまた血の女王か。

どれでもいいし、どれもしつくりこない。少しばかり思考の瞳を働かせた【狩人】は、良い名前を思い出した。これならば、己を呼ぶに足る名であろうと。

白い獣に【狩人】は向き合う。そしてその名を口にした。

「9k v 8 x i y i」

「……………え？」

「3 e u k e n p k …… p 3 u m y z t u ……」

「あ、あの…………？」

「8 e w m 2 x x x n k d y e 4 z x q j p k t u s u w 5 s 2 e c p 6 7 e n p b r
t a c a s u 4 d q m s 3 x h w 5 8 s j r u q 6 b 9 s」

「ちよつ!? や、やめ、頭が、頭がアツ——!?」

その日以来、【ヘステイア・ファミア】の廢教会に、【狩人】が現れるようになったという。

【狩人】

幼年期の終わり。頭上位者。9 k v 8 x i y i。通称きゅーちゃん。あるいはきゅーけー。

終わらない悪夢を巡り続けて自己と他者の区別がつかなくなった発狂狩人。

記憶の中にある他者を自分と思い込み、その時々で言動・容姿がまるで異なる。

ひどい時はガスコインがアリアンナの服を着て人形のように振る舞う地獄が生まれる。

狩人アイは全てを見通す。世界は漁村とメンシスの悪夢をほおずきブレンドした発狂ワールド。人は獣、神は軟体生物。怪物はああ、窓に！ 窓に！

狩人イヤーは全てを聞き取る。人の声は獣の咆哮でしかなく、全知無能の神の言葉は交信を用いなければ届かない。故に怪物の言葉も解している。

遠い昔オラリオに現れ、死んでは目覚めをやり直してきた。だからそういうものだと認識されている。

全ての遺志を継ぎ、超次元に至り、故に狂った狩人。赤子の上位者、人の獣。

その気になればオドンのようなこともできる。紐神の明日はどっちだ。

ベル・クラネル

白い獣。【狩人】に関わるべきではなかった。不憫な子。

やがて君も知るだろう。たとえば世界を違えようと、獣狩りの夜は、ずっと変わらない。

ヘステイア

胸に紐をつけた軟体生物。【狩人】についてよく知らない。紐神が紐神たるゆえん。

エイナ・チュール

【狩人】がギルドに赴くと半分くらいの確率で絡まれる可哀想なハーフエルフ。鋼の表情筋。

ミイシャ・フロット

同僚を気にかけてつも【狩人】に関わりたくない筆頭。【狩人】のせいで仕事が増える。許すまじ。

「ちあきら」に囚われたギルド職員

地底を掘り続け恐るべき嗅覚で宝石を見つけ出す。しかし「ちあきら」ではなく、職

員にとって価値はない。家族はそれを元手に生活し、職員の療養を続けている。

ベート・ローガ

売られた喧嘩を買ったらしいの間にか負けていた上に顔にナメクジを塗りたくられた人。

平たく言えば軟体ゴキブリを顔に塗りたくられたのでその後の評判はお察しである。
赦してくれ……赦して……くれ……ヒツ、ヒヒヒヒヒヒツ……

ロキ

神様専用【狩人】観察クラブの支柱。別にそういうクラブがあるわけではない。
腹を抱えて笑い転げる様が聖歌隊の交信と同一視されているとは夢にも思えない。

シル・フローヴァ

【狩人】と絶対目を合わせない街娘。だって明らかに「見ちゃいけません」な人だもの。

アーニャ・フロメル

勢いで会話してたらそのうち慣れた。【狩人】と意思疎通できる数少ない人物。

ミア・グラント

獣血の主。

つまらないものは、それだけでよい武器ではあり得ない

路地裏を歩いていたりリルカ・アーデは横たわる「狩人」を見つけてしまった。

「ひっ……！」

思わず出かけた叫びを噛み殺せたのは僥倖だったろう。なにせ「狩人」は刺激すると口クなことにならない。

冒険者の新人歓迎、あるいは度胸試しに「狩人」が使われるのはそのせいだ。「狩人」という理不尽かつ困難な存在は、ある意味ダンジョンの恐ろしさと紙一重なのである。

ある新人は線の細い消え入りそうな女性の「狩人」と出会った。一目惚れした新人は「狩人」の許に通い、女性がいつの間にか椅子に固定され、頭が肥大し、最後には頭だけになる末路を見た。

以来その新人はどんな『迷宮の悪意』にも動じない精神を培ったという。その代わりに決して女性と目を合わせなくなったそうだ。

彼にはもう全ての女性の顔が肥大化した頭部に見えてしまっていた。

あまりにも憐れだ。そんな目にリリは遭いたくない。だからすぐにでも立ち去ろうとし——リリの右手が掴まれた。

「えっ」

「——死体漁りとは、感心しないな」

「はっ!?!」

何ヲ言ツテルンダコイツハ。硬直したりりはゆっくり手を放されても謎ムービーシオンの圧力で動けない。

立ち上がった【狩人】は、ぞつとするほど美しい長身の女になっていた。

「だが、分かるよ。秘密は甘いものだ」

言いながら、【狩人】はどこからか両刃の剣を取り出し。

「だからこそ、恐ろしい死が必要なのさ」

ガキイイイイインツ!! と恐ろしすぎる音を響かせ。

「……愚かな好奇を、忘れるようなね」

怯える少女を見下ろしながら、そんなことをのたまった。

リリは全力で逃げ出した。

「なんで追っかけて来るんですかあああああああああああああああつ
!?!」

憐れな小人バルウム族の悲鳴は、しばらく途絶えなかつたという。

はっ、と【狩人】は目を覚ました。

目玉とフジツボに満ちた前衛建築、血塗れの路地に佇む【狩人】は手に持った《落葉》を見て首を傾げる。

はて、なぜ《落葉》を手にしているのか。今は時計塔の死者のつもりではない【狩人】は虚空に尋ねる。マリア様、どうして私が《落葉》を？ ねえ、マリア様？ マリア様？ ねえ、ねえ。

肉壁が喋るはずもなく、辺りは獣の声ばかり。変形した《落葉》をしまうためパキンッと変形前に戻した【狩人】は——とても不満気な顔でもう一度《落葉》を変形させる。

違う、この音ではない。自分のマリア様《落葉》はこんなシヨボい音を出さない。

血走った目をかっ開き《落葉》を凝視した【狩人】は、やがてガキイイイインツ！と変形機構をブチ鳴らし、満足そうにどこかへしまった。

なんてことはない。《落葉》は純技術武器だが、筋力で強引に変形させればいいのだ。つまり自分マリア様は脳筋なのだ。致命の火力も低いし。

秘匿はまた一つ破られた。見よ、青ざめた血の空だ。宇宙は空にある。

記憶に眠る無数の他人じぶんを繋ぎ合わせて【狩人】は歩く。見知らぬ道はいずれどこぞの古都なのだろうが、きっと寝ぼけていたのだろう。

感応する精神とはいえ、「狩人」は今も夢を見る。日の光は「狩人」に似合わない。だから昼間はよく眠る。だが眠りと悪夢は切っても切れず、体が闘争を求めるとも致し方ない。

ふと目を覚ましたら臙物風呂で軟体生物たちにボコボコにされていたこともある「狩人」は、やがて来る夜の気配に口角を引き裂いた。

また、獣狩りの夜が来る。《獣狩りの斧》を手に、「狩人」は塔へ走り出した。

誰かの叫び声が洞窟に響いた。ダンジョン上層に潜る冒険者パーティの一つは顔を見合わせ、一応声の主を確かめる。

角を曲がってそこにいたのは、しかして血塗れの「狩人」だった。

右手を横に、左手を上へ広げる「狩人」は膝をガクガクと上下させながら定期的に叫び声を上げていた。ときおり両手を伸ばす向きをスイツチし、スツと元に戻している。

見なきやよかった。パーティはげんなりと肩を落とすし、足早に去っていく。「狩人」は冒険者にとって縁起が悪い存在だった。悪い夢のようなものだ。今日は帰って風呂入って寝よう。

そんな冒険者パーティなど気に止めず、「狩人」は「交信」と「叫び」を繰り返す。今

日こそは空に、宇宙に遺志が届くかもしれない。美しい娘よ、泣いているのだろうか。

地上と天界の神々が強烈な毒電波に頭を痛めているとも知らず、「狩人」はしばらく奇怪なジェスチャーを続け、やがて落胆した様子で「交信」を切った。

やはり遺志を返す者はいない。「狩人」は己以外の上位者をこの世界で見たことがない。己はずっと一人なのだろうか。

たまには上位者を狩りたいと寂しがりつつ、新たに湧き出た名状し難い怪物たちに「狩人」は仕掛け武器を振るう。

血肉が飛び、今日も怪物の断末魔が響く。やがて狩りが終わり、灰と死体が散らばる中、「狩人」は武器を振って血糊を飛ばした。

死闘の後、なお一人立つ。「狩人」ならば、やはりそうあるべきだろう。

「……」

しかし、だ。やはり物足りない。

《ノコギリ鉋》をガシヤガシヤと変形させながら「狩人」は不満を表す。

足りないのだ。おぞましい悲鳴が、身に降りかかる肉片の熱さが。何より血の甘やかさが足りない。

《ノコギリ鉋》では駄目だ。良くも悪くもスタンダードなこの武器では血の奥底より湧き上がる狩りの衝動が抑えきれない。

「つまらないものは、それだけでよい武器ではあり得ない」

かつて自分^{パウダーケツク}が嘯いた言葉を呟き、「狩人」は踵を返す。

武器が不満だ、ならばどうする？ 決まっている、作ればいい。

いざ行かん、狩人の工房へ。「狩人」はおもむろに《メンシスの檻》を被ると、無限ダッシュを可能とするミコラ神拳交信走法を駆使して地上へ突っ走った。

「ギルド長!?」
「狩人」が『怪物進呈』^{バス・バレイド}をしながら地上に向かっています!?

「ええいまたかつ! さっさと「ガネーシャ・ファミア」を動員して対処に当たらせろ!
絶対にモンスターを地上に進出させるな!!」

それが地上で日常的大騒動を起こしているなど、笑いながら疾走する「狩人」の知ったことじゃなかった。

〈●〉 99

「来たぞー! てめえら、ありったけの武器を構えろ!」

「絶対に「狩人」を中に入れるな!」

「鍛冶師^{スミス}として矜持がある！ これ以上好き勝手されてたまるかっ！ 行くぞおっ!!」

「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!」」

数分後。

炎のような紅い館の前には、ナメクジ入り上位者ミルクをぶっかけられた憐れな鍛冶師たちが転がっていた。

「……で、結局こうなったのね。だから止めなさいって言ったのに」

死屍累々に呻く光景に頭を痛めるのはヘフアイストスだ。嘆息する隻眼の女神は、ギユインギユインガガガと気違いじみた金属音のする背後へ振り返る。

そこには何本もの触手を駆使して大量の火花を散らすプロッコリーの化身がいた。

「……」

否、否である。それは「狩人」だ。頭に理解してはいけない類の植物が生えた触手人間である。

いや、それも否だ。「狩人」は人間ではない。神々の子どもたちではない。そこは全ての神々の見識が一致するところだ。

ならば「狩人」とは何なのか。ある神は『招かれざる異界からの来訪者』と笑い、ある神は『悪意と冗談と宇宙的ホテップに手足が生えた魔物』と嘆き、ある神は『いあ！

いあ！ ちよぼらうによほみ ふたぐん！』と啓蒙^{はっきよう}する。

ヘファイストスはすでに考えるのをやめた。彼女は「狩人」出現最初期に初手で己の工房に突撃され、あれよあれよと改造された拳句に今日まで利用されている。

神々の中でも善神かつ被害の大きいヘファイストスの心労は計り知れない。だから無となつて「狩人」をやり過ぎさねば胃痛で常時寝込んでしまう。

抵抗という抵抗はすでにやり尽くしており、なおも「狩人」に立ち向かう眷族たちには憐憫を向けつつも理解し無理に止めなかった。

自分の工房、自分の城をここまで残酷に台無しにされては、どんな鍛冶師でも自己崩壊を起こしてしまうだろう。時折飛んでくる粘液だけは俊敏に避けながら、ヘファイストスは書類仕事をすることにした。

「邪魔するぞー、主神殿。っと、「狩人」も来ておったか」

ヘファイストスが机に腰掛けたタイミングで現れたのは椿・コルブランドだった。

「ヘファイストス・ファミリア」団長、Lv. 5の第一級冒険者、「単眼キユクの鍛冶師ロブス」。

『最上級鍛冶師』と称されるハーフトワッフの椿は、「狩人」に対してあまり敵愾心を抱いていない。

理由は一つ。彼女が弩ドが付くほどの鍛冶馬鹿だからである。

「今日は何を造っておるのだ？ おお、これはまたエラく複雑怪奇よな。どれ、手前にも一つイジらせてくれ」

冒流的な動きで鍛造を進める【狩人】に近寄った椿は遠慮なしに並べられた部品を手取る。

それをペシツと【狩人】ははたき落とし、手についた粘液を拭う椿にペイツと適当に《パイルハンマー》を投げ渡した。

それを興味深そうに解体して弄くり回す椿を視界の端に捉えながら、「今日は【火薬庫】の日なのね」とヘファイストスは無意識に思った。

【狩人】にとつて椿やヘファイストスがどのような位置づけなのか定かではない。しかし元ヘファイストスの工房にいる間に限っては、どうやら同じ工房仲間と【狩人】は見ているらしかった。

だからか、【狩人】は鑄造過程を隠さないし技術は全て公開している。聞けばまともに答える確率も1%くらいはあるし、語らずとも互いの分野を模倣・昇華することで言葉なき鍛冶師の交流を営んでいた。

特にヘファイストスは長年の経験から一目でその時々【狩人】の傾向が分かっけしもうくらいだ。【火薬庫】の他にも【アーチボルド】【教会】【カインハースト】【古狩人】など、【狩人】の工房にはある種の派閥があるようだった。

まあ、それが何の役に立つかといえは、【狩人】に話が通じるか否かのちよつとした指標程度でしかないが。

そして今日は全く通じない日であるとヘファイストスは判断した。

「……むう、ここに仕込まれた小さな刃は全て『魔剣』か？　よくもまあこんな褒めて良いのか呆れて良いのか区別のつかんことをする。これを仕込んだ意味はなんだ？」

「つまらないものは、それだけでよい武器ではあり得ない」

「おお、今日はそのパターンか。これでは話はできんなあ。手前で勘繰るしかないか。

うーむ、うーむ……ここがそれでこうなつて……ああ、成程。やはりと言うべきか、火力の底上げに使つておるのだな。しかし『魔剣』など仕込まずとも元より馬鹿げた火力であろうに……」

「つまらないものは、それだけでよい武器ではあり得ない」

「ああ、ああ、分かつておるとも。意味の分からんほど精密な機構も、手入れの難儀さを度外視した湯水のような金と素材のかけ方も、汎用性なんぞ投げ捨てた使い手が武器に合わせろと言わんばかりの使いにくさも、すべてはそのためであろう？」

「つまらないものは、それだけでよい武器ではあり得ない」

「お主がそういうものだど理解してはやるが……手前には分からん！　全く分からん！

『至高』の前に『浪漫』を是とするなど、いまだ届き得ぬ手前には分かつてやれん。その気になればいくらでも辿り着けるだろうに、そこだけは残念な奴よ。

……いや、訂正する。そこ以外もお主は残念だったな。特に頭が」

話を通じたのかはしらないが、急に触手プレイを強要してきた「狩人」に椿は長嘆した。肌や鍛冶に邪魔な胸にぬめる触手を剥がして「興が削がれた、風呂に入ってくる」と椿は退室する。

それを追わず、椿の置いた『パイルハンマー』を絡め取った「狩人」は、超小型『魔剣』や希少素材をつぎ込んだ小型炉を『パイルハンマー』に取り付け始めた。

ギャルリンギャルリンと鳴り響く音を背景に、ヘファイストスは「また市場が荒れるわ……」と遠い目をしながら書類を片付けるのだった。

【狩人】

寝ぼけてマリア様になる人。Q：リリは逃げられましたか？ A：頑張つてボス部屋

から脱出しました。

きゅーちゃんとかきゅーけーとかは今のところベル君たちしか呼ばないのであまり出番はない。せつかくの聖杯文字が名前の「狩人」という希少価値が台無しである。

オラリオに來た当初、ヘファイストスの工房を見て「ほーん、ええやん」と奪い取った。ゴブニユのとも同じように奪い取ってる。善神ほど被害を与えてしまうのは「狩人」の性なのか。

このあと完成した《ヒートパイル》は意気揚々と地下に潜った「狩人」の前にちやうど現れた『ゴライアス』君を一撃で壁のシミに変えた。『嘆きの大壁』とは『ゴライアス』の涙のことだろうか。

ちよつと強すぎない？ そう思われるだろうが、「狩人」は工房主なので血晶石を詰め込めるだけ詰め込む魔改造をしている。チートやチート！ 地底人に謝れ！

リリルカ・アーデ

可哀想な小人族^{パルゥム}。作者の書いてるもう一方でも可哀想な小人族^{パルゥム}。

はやくベル君救ってあげてくれ。そしてそのままキャツキャウフフのラブロマンスであなたと私の二人つきりなウエディング☆ベルへ一直線ですよコノヤロー！（あざとい叫び）

そんなことボクが許すと思うなよバカヤロー！（紐神の叫び）

一目惚れした新人

初恋の【狩人】の頭が肥大化して発狂寸前に至るも当時は低啓蒙だったのでからくも逃れる。しかし「お願い、私を見捨てないで……私まだ、役に立てるのだから……」とCV花澤○菜で囁かれ最後まで突っ走ってしまった。

その後、彼は人格こそ保ったもののどんな時でも動じなくなってしまう、先輩や【ファミア】上層部は大いに反省し、新人団員を【狩人】に接触させないようにした。

同期の女性はそんな彼を頼りにしつつも、目を合わせてくれないことに少しだけやきもきしてるとかなんとか。

本来の世界線では【超凡夫】^{クイ・ノービス}とか呼ばれてる。

ヘファイストス

憐れな女神。【狩人】に奪われた工房はどんな手段でも奪い返せなかったので別に新しい工房を新設した。

このことについて永遠に許す気はないが、【狩人】に構うだけ無駄なので放置している。

【狩人】は作った武器や【狩人】由来のアイテムを製法込みで大量に残している。それへファイストスは死蔵したかったが周囲の神々の圧力によって泣く泣く売りさばいている。

今回の《ヒートパイル》も【狩人】が量産して在庫を積み上げるのは目に見えているので今から胃が痛い。

椿・コルブランド

究極的に鍛冶の『至高』に辿り着くこと以外眼中にないので【狩人】を受け入れてしまえる人。主神への忠義や鍛冶師の矜持をぶつちぎるほどに【狩人】のもたらず技術、見識を貪欲に求めている。

【狩人】と一番話を通じるのは【アーチボルド】の時。意外に思われるかもしれないが、彼女は極めてビルゲンワース的な鍛冶師である。

ゴブニュ

【狩人】を絶対に許しはしない。そう、絶対にだ。来たら必ず【狩人】の頭を叩き割っている。

しかし【狩人】は動じない。むしろ頭をほじくっても瞳なんぞ見つからないのになぜ止めないんだろう、頭がおかしいのかな？ と筋違いの心配を【狩人】にされている。それがゴブニュに知られる日こそ、【狩人】とゴブニュの終末戦争^{ラダナロク}が勃発する日なのだ。

知ってるもの。夜の次は朝だって

「お帰りなさい、狩人様」

「フアツ!？」

ベルが探索から戻ると、廃教会の地下室前で幻想的と呼べるほどの美女が出迎えた。

2 Mメドルを超える長身、ごく手入れのされた質の良い服。

艶やかな灰色の髪と瞳、白く静謐な美貌がそこには宿っていた。

「あのつ、えつと、ど、どちら様でしょうか!？」

「私は人形。この夢で、あなたのお世話をするものです」

「お世話っ!？」

「狩人様。血の遺志を求めてください。私がそれを、普く遺志を、あなたの力といたしまし
しょう。」

「獣を狩り……そして何よりも、あなたの意志のために。どうか私をお使ってください」
「お使いくださいっ!？」

「一体全体どういうことか分からないベルは初な表情を真つ赤にさせて混乱で目をグルグル回す。」

「カラーっ！ ボクのベル君に手を出すんじゃないっ！」

そこに地下室から躍り出た一柱の女神がガシツッ！ とベルの頭に抱きついた。

「騙されちゃダメだベル君！ この子はきゅーけー君なんだ！ 【狩人】君なんだぞ！」

「えっ!? きゅーけーさん!? いやでも、この方は女の人ですよね!」

「きゅーけー君は自在に姿を変えられるんだ！ そもそも君が連れてきた時だつて一秒

ごとに容姿が変わる不定形存在だったじゃないか！」

「えっ!? そ、そんなはず……あれ、でも確かにそうだったような……きゅーけーさんは

【狩人】さん、【狩人】さんは獣狩り、獣は呪い、呪いは軛……輪舞マラソン……ヌヌ、ゴ

シアナ……うう、頭が……」

「はっ、しまった!? 思い出しちゃ駄目だベルくん!」

「うう、神様、僕は一体……かつ、神様アツ!? 胸がっ、胸がっ!」

ヘスティアの豊満な胸に押し込まれたベルは思い出しかけたことが全部吹き飛んでしまった。それが良いことか悪いことか、脳に瞳を持った者だけが知るだろう。

「ああ、お寒いでしょう。狩人様……」

ワーワーと騒がしい彼らに、自分を人形だと思い込んでいる【狩人】は^{ベル君}狩人様の世話をするために、ヘスティアを丁寧に引き剥がして少年をお姫様抱っこした。

そのまま真っ赤になってガチガチに硬直するベルに微笑みながら地下室に連れて行

く人形を、ポカーンと見送ったヘステイアが怒号を上げて追いかけるのだった。

◀ ● ▶
99

怪物祭と呼ばれる行事がオラリオにある。
モンスターフライリア

ギルド主催、「ガネーシャ・ファミリア」主導のモンスターの公開調教である。
ティム

パンとサーカスなどと揶揄されるものの、普段見られないモンスターの恐ろしさ、それに立ち向かう冒険者の勇ましさを一度は目にしようと、怪物祭に合わせ都市内外から多くの観客が集まっていた。

舞台は円形闘技場、
アンフィシアートルム座席という座席が多くの亜
デミ、ヒューマン人で埋まった舞台の中央に、奴はい
た。

そう、頭からカリフラワーを生やし、啓蒙高き軟体踊りで体を高速振動させる【狩人】である。

「俺がガネーシャだ！　そう、俺が【群衆と獣の主】
ガネーシャのフレンズだあああああああああつ!!!」

なぜ【狩人】がここにいいのか。それは暑苦しい男神の声からお察しの通りだ。

ガネーシヤは「狩人」と意思疎通が可能な稀有な神の一柱だった。

互いに雄叫びを上げ存在を誇示し合う神と上位者は、その精神が夜空の星灯りの漿液湖に至り、共鳴する波長の軸芯融和を果たしたのである。

よつてガネーシヤは「狩人」の言葉を知り、「狩人」は交信によつてガネーシヤの精神を汚染した。意気投合した一柱と宇宙的悪夢はその場のノリで協力が可能になったのであった。

モンスターでも人間でもない冒流存在である「狩人」を怪物祭モンスターフイリアに引きずり出す。それはガネーシヤとギルドの主神の神意に沿う効果をもたらさだろう。

絶対に外さない仮面に大量の目玉を取り付けようとしたが眷族に号泣されて止められたガネーシヤは、大変不満ながら「ファミリア」の本拠『アイム・ガネーシヤ』の右腕を四本、左腕を三本に増やすだけで我慢していた。

『おおつとお！』「狩人」、ここで『吐き気を催す例の光』を放ちました！ 精神を病まれた方は至急事前配布されたお薬をお飲みください！ モンスターすら自我崩壊を引き起こす光ですのでどうぞご注意ください！』

実況は『喋る神秘魔法』を自称する「冒流聖杯エーブリ3000階層踏破者エターヌス」ことイブリ・アチャード。肥大した頭部を被り「狩人」由来のサングラスを頭頂にちよこんと乗せるおちやめな彼は、色々な粘液をだらだらと首筋に垂らしながら抑揚が裏返った金切り声で

実況する。

イブリの声以外シンと静まった舞台で「狩人」は体に巻きつけた触手を解いた。そして目の前で精神崩壊を起こし顔の穴という穴から液体を垂れ流す『シルバーバック』に近づき、秘儀「幸せな開放」を発動させる。

相手の耳に触手を滑り込ませクチュクチュすることによって相手を極度の幸福状態にし従わせる秘儀だ。水銀弾を触媒に発動するこの秘儀は、シルバーバックに脳に瞳を得たかのような晴れやかな幸福を与え、死ぬまで絶頂に導き続ける文字通り『幸せな開放』をもたらすのである。

こうして調教^{タイム}を完了した「狩人」はシルバーバックに乗り、冒瀆的な踊りをしながら会場を後にする。

観客は上々の反応で、頭を押さえ呻く者七割、現実を受け入れられない者二割、延々と笑いながら空に手を伸ばす者一割だった。

今年の怪物^{モンスターファイア}祭も、例年の如く大成功のようであった。

狩人、狩人、狩人。直近の「狩人」は自分の存在に疑問を抱いていた。

自分は何の狩人だったか。【教会】か？ 【貴族】か？ はたまた【異邦】か？

【狩人】にとつて物忘れは珍しいことではないが、それを放置するのは嫌に気分が悪い。

自己を明確に定めるため、肌から無数の白いミミズが生えている大猿の怪物に乗りながら【狩人】は思考する。

そうしていると、辺りから獣の悲鳴が聞こえ始めた。ギョロギョロと瞳を回転させれば、名状し難い怪物たちが獣共らを追いかけている。

その中にふと、小さくか弱い、少女のような獣を見つけ。

【狩人】は己が何の狩人であったか、ようやく思い出すのだった。

アイズ・ヴァレンシユタインはオラリオを駆ける。

アンファイテアトルム

円形闘技場から逃亡したモンスターを駆逐するためだ。

風を纏い、飛翔するように屋根を走り抜け、人に襲いかかる怪物を一刀で斬り捨てる。
(数が多い……どうしてこんなに?)

すでに数十の怪物を斬り払ったアイズは住人を逃がしながら困惑する。

【ガネーシャ・ファミリア】はこんなにモンスターを捕まえていたのか？

テイム
調教するに

しても多すぎる数に思わず眉間に力が籠もる。

辛い犠牲者は出ていないが、これでは時間の問題だ。急いで事態を収束しなくては、と麗しき金の【剣姫】は【エアリエル】の出力を上げる。

そして怪物を探し、屠る最中、たった一人で歩く少女の姿を見つけた。

「！」

避難誘導をするためアイズは側に着地する。魔法の風が吹き荒れるものの、少女はなんら気に留めた様子がなかった。

「大丈夫？」

「エツエツエツエツ……」

「ここは危険。早く逃げて」

「お父さん、お母さん、帰ってきてよう……寂しくって……怖いよう……いやだよう……グスッ」

「……はぐれたの？」

「一人はいやだよう……エツエツエツエツ……」

「……」

アイズが話しかけても反応せず、少女はトボトボと歩いて行く。その姿に幼き日の記憶を刺激されるアイズは途方に暮れるが、少女の行く先に怪物の姿を捉え、キツと表情を鋭くする。

(……怪物を倒して、この子を安全な所に届ける。まずはそうすべき……！)

疑問を置いてアイズが走り出そうとした、次の瞬間。

怪物の懐に、いつの間にか少女の姿があつて。

醜悪な外皮を貫いていた小さな手が振り抜かれた直後、モンスターは大量の血を吹き出して絶命した。

「——え？」

少女は血の雨に打たれていた。

両目を腕で覆い、泣き続ける少女。血と肉がこびりつく右手には、何かがひらひらと揺れている。

呆けるアイズの目の前で、少女に更なる怪物の影が迫る。

「エツエツエツエツ……」

顔も上げず、泣き暮れる少女は。

怪物の爪を紙一重で躲し、無防備な鳩尾へ腕を突き刺し、千切り抜く。
響く怪物の断末魔。立ち止まったまま鮮血を浴びる少女。

続々と現れるモンスターたちに、少女は泣きながら歩み寄り——虐殺が始まる。

「アイズ！ 加勢に来たわよ、つて……」

「どうしたのテイオネ、早くアイズを手伝わないと……なに、あれ……」

立ち尽くす【剣姫】に駆け寄るアマゾネスの姉妹は、その光景に同じように動きを止めた。

モンスターに囲まれ、けれど傷一つ負わぬ少女。

紙一重で攻撃を躲し、【加速】し、怪物の臓物を抜き千切る姿。

泣きながら一切の容赦なく異形を屠る右手に巻かれた、血塗れの赤リボン。

それは冒険者たちの間で有名な、だが決して地上に現れぬはずの、ダンジョンにのみ見える異質。

「アイズたん、どないしたんやー？ って、な、なんやアレは!？」

マイペースにやって来て仰天するロキに、アイズはポツリと呟いた。

「——オーゼイユ」

「は?！」

「血涙ちなみだの、オーゼイユ」

「ア、アイズたん？ なに言うてるん?」

「泣いている少女の形をした——【狩人】」

「はあっ!?! アレが【狩人】やお!?!」

目を剥く道化の女神を他所に、アイズは見続けていた。

怪物を殺し、殺し、殺し、ただ殺す、赤リボンを巻いた少女を。

やがて殺し尽くし、死闘の後なお一人立つ——血塗れの「狩人」、
// 血涙のオーゼイユ // を。

「エツエツエツエツ……」

顔を伏せ、左腕で覆いながら少女は歩き出した。

アイズたちの方へ。硬直し息を潜める彼女たちの前に立ち——少女は血の雨を浴びた顔をアイズに見せ、静かに問いかける。

「……あなた、だあれ？ 知らない人、でも、なんだか懐かしい臭いもするの。

もしかして、獣狩りの人かな？」

「……」

「だったら、お願い、お母さんを探してほしいの。獣狩りの夜だから、お父さんを探すんだって……それからずっと帰ってこない。

私ずっと……でも、寂しくって……」

「……」

「な、なあアイズたん、なんで黙ってるんや？ 少しくらい話たつても……」

「ロキは黙ってて!!」

「なんでや!!」

恐る恐る声をかけるロキにティオナとティオネが凄まじい剣幕で怒鳴りつける。口

キはビビッて縮こまり、アイズは強い緊張を滲ませる表情で、毅然と言い放った。

「駄目。私たちはあなたに協力できない。決して——たった一度でも」

「……わかりました。ごめんなさい、獣狩りさん、お話ししてくれてありがとう。」

お仕事、がんばってね」

「……」

「エツエツエツエツ……エツエツエツエツ……」

顔を伏せ、涙を流しながら少女は去っていく。それを固い表情で見送って、アイズ達

三人はふーっと一様に息を吐いた。

「どういふことなんや……ただの子供にしか見えんかったけどなあ」

「あのねえ、ロキ。いくら無害そうに見えても【狩人】なのよ？ 関わっちゃいけないに

決まってるじゃない」

一人訳の分からないロキはボヤクように言い、ティオネが苛立ち混じりに説明する。

「冒険者はアレを『血涙のオーゼイユ』って呼ぶわ。ダンジョンにしか現れないはず

の、女の子の振りをした【狩人】。何を頼まれても絶対に答えちゃいけないヤツよ」

「あー、聞いたことあるようなないような……でもなんでや？ 答えるくらいええやん

か、泣いとる子放置するとか胸糞悪いで」

「……ロキもあれを見れば、そんなこと言えなくなるわ。応えて、知って、もしいいてい

こうものなら……思い出したくもないわ……あんな、おぞましい……」

知らず冷や汗を流すティオネの強い警戒心にロキは黙りこくる。

同じように警戒を解かないティオナと、アイズの瞳の中で。少女は延々と泣きながら、とぼとぼと歩いていった。

こんなにも晴れ渡った空の下で。暗いトンネルの奥へ、消えていくように歩く少女を。

【狩人】

不定形で確かな姿を持たない【狩人】には、だがその有名と不吉さから別の名を与えられた姿がある。

“血涙のオーゼイユ”もその一つだ。

血塗れの赤リボンを右手に巻いた、俯いて泣き続ける少女。

冒険者たちは彼女をおして、三つの禁句を共有している。

応えるなかれ。関わるなかれ。共に歩むなかれ。

それを破った冒険者は、迷宮の届かざる領域に辿り着くという。そして奥底の、人に到底理解し得ぬ神秘に出会った者は――

“血涙のオーゼイユ”。

血の涙を流すのでなく、血を涙で洗う少女。最も幼く、無慈悲で、危険な【狩人】。

という建前のヤーナムの少女を摸倣した【狩人】の姿。

あいにくと【狩人】は豚を一撃の元にリボンエンチャで沈めた少女の行く末を知らないで、狩りの最中に覚えている記憶を自分だと信じている。

不穏なのは全部【狩人】のせい。明らかに善良な少女なのにそれが自分だと思いつむ

【狩人】は少女と【狩人】脳で合体事故を起こし、最終鬼畜ヤーナム少女が爆誕した。

なおヤーナムの少女の名前は作者の知る限り公開されてないので適当につけました。ググればすぐ分かるんじゃないかなニヤルラトホテプ。

ガネーシヤのフレンズ

【狩人】と交信を果たしてしまった不運な男神。本人は全く不運だと思っていないしむ

しろ新たなガネーシャ、「ネオ・ガネーシャ」の一形態が開かれたのでとにかく良しと
している。

怪物祭における怪物大脱走の責任を負わされて『アイアム・ガネーシャ』の七本腕を
二本腕になるまでへし折られる罰を受けた。本人は絶対に嫌だと泣き喚き許しを乞う
たが決して許されることはなかった。

なお、脱走したモンスターの大半は「狩人」がアンファイテアトルムが円形闘技場周辺に勝手に持ち込んで隠
したモンスターであると後日判明するが、やはりガネーシャが許されることはなかつ
た。

アメンドーズみたいなガネーシャ像気持ち悪いんだよ。それがガネーシャ以外の神
の総意なのだ。

イブリ・アチャー

聖体を拝領し地底人となった男。過酷な聖杯探索を啓蒙の果てに得た神秘魔法に
よって走り抜け、ついにエブたそに見えた幸運な眷族。

その鍛え抜かれた肉体と全身に装備した神秘血晶によってLv. 6に到達した「ガ
ネーシャ・ファミリア」最強の冒険者。

なお神秘血晶とエブたそから貰った肥大した頭部（あとサングラス）以外何も着てい
ないので、どこに出しても恥ずかしくない変態である。

変態と罵られると喜んで神秘魔法（意味深）を撒き散らすので刺激しないように（b
Yシヤクテイ・バルマ38歳独身）

【幸せな開放】

本作の【狩人】の台詞はネットに転がってるブラボ解析情報からコピペしてるんです
けど、なんか没っぽい秘儀一覧の中にあつた。

他にもとても興味が引かれる秘儀の名前がかかれていた。その名も聖液受領。

聖液受領

聖液受領

やっぱフロム・ソフトウェアってド変態の集まりだわ

異端の鍛冶師は狩人の夢を見るか

「ヘファイストス・ファミリア」には「火薬庫^{パウダー・ケツグ}」と呼ばれる男がいる。オラリオ才士、いや『古代』より続く鍛冶師の系譜の中で、異端と称される工房主だ。

「ヘファイストス・ファミリア」本拠^{ホーム}から遠く離れた、うらぶれた教会の側に工房を構える「火薬庫」は、複雑怪奇な機構を持つ奇妙な武器を造り出すという。

それはこれまで武器とされてきた刀剣類の形状から大きく外れ、いつそ何らかの工具と言った方が近いものも多い。事実、「火薬庫」がまだそう呼ばれる事のなかった無名の時代、それを武器として扱う者は同じ鍛冶師の中にすらいなかった。

だが世の中には酔狂な輩がいるもので、面白半分に「火薬庫」の武器を買ってダンジョンに潜る冒険者がいた。その武器を見た誰しもが疑問を抱き、ああダンジョンの恐ろしさを知らぬ愚か者かと嘲笑ったものだ。

だが——実際にその武器が振るわれる姿を見た者は、決して「火薬庫」の武器を侮らない。それがどれ程恐ろしい性能を有しているのか、身に染みて理解しているからである。

一撃必殺、二の太刀要らず。ただ一発の渾身にのみ特化した「火薬庫」の武器は、そ

の複雑な機構から繰り出される爆発的な火力で数多くのモンスターを屠ってきた。

上層、下層、深層を問わず。時には階層主、『迷宮の孤王』モンスター！レックスでさえも一撃の元に粉碎してのけた。『火薬庫』の武器は、性能が広まるにつれ窮地を切り抜ける逆転の武器として多くの冒険者に求められることになる。

……だが、『火薬庫』はその奇妙な名声とは裏腹に、武器のほとんどを市場に流さなかつた。売る事を拒絶するあまり一時期はオラリオから姿を消した『火薬庫』を、頭痛の種とする主^{ヘファイストス}神はこう評している。

『火薬庫』の武器は正統にあらず。それはただ獣を狩るための、祈りにも似た異装なのだ、と。

「それじゃあ、神様！ 行つてきます！」

廃教会の古びた柱に少年の声が浅く染みこむ。ベル・クラネルは地下室の扉を閉め、崩れた門を通り過ぎた。

「おはようございます！」

そして隣人に日課の挨拶をする。廃教会の隣、まるで焼け跡のような工房で槌を振るう鍛冶師に向けて。

奇妙な男だった。鉾石を熱する炉に近いにも関わらず、厚手のコートを纏っている。全身は暗い色で満たされ、枯れた羽根が特徴的な帽子を目深に被っており、その上で黒い布を顔中に巻いているのでどんな人物か分からない。

男はベルの声に槌を高く掲げて反応を示し、そのまま鍛冶に戻る。ベルは笑顔で大きく手を振って、ダンジョンへと向かった。

「おお、やつとるのう、^{パウダー・ケツク}火薬庫」

昼下がり、焼け跡のような^{ツバキ}火薬庫の工房を訪れたのは「ヘファイストス・ファミリア」団長、^{ツバキ}椿・コルブランドだった。

急な来訪者に、しかし^{インゴット}火薬庫と呼ばれた男は何の素振りも見せず、黙々と精製金属に槌を振り下ろす。無反応を貫く男に^{ツバキ}椿は肩をすくめ、ずかずかと工房内に足を踏み入れた。

「またお主は妙な物を造っておるな。歯車、螺子、バネに引き金、管に鎖に……これは魔剣か？ よくもまあこんな指の長さほどもない魔剣を造るものだな。^{たち}質の悪い冗談としか思えん」

焼け残った机に並べられた部品の数々を手にとっては見比べる^{ツバキ}椿に、^{ツバキ}火薬庫「はや

はり反応しない。工房主が黙っているのを良い事に、^{ツバキ}椿はしばらく工房内を漁り回った。

「おお、そうだ『火薬庫』。近い内に遠征に行くぞ」

『火薬庫』の鍛造が佳境に入っている最中、ふと思い出したように^{ツバキ}椿は言った。槌を振り上げた『火薬庫』は、その姿勢のままピタリと止まる。

「【ロキ・ファミリア】からの依頼でな、遠征に上級鍛冶師を幾人が貸してほしいそうだ。無論、手前も含まれておるぞ。」

報酬は『深層』のドロップアイテム。市場にも滅多に流れない垂涎物の素材よ。『至高』を指す鍛冶師ならば、当然手に入れたと思うだろうなあ」

「……」

沈黙を保っていた『火薬庫』は、振り上げたままだった槌を振り下ろし、カアンと一際大きな金属音を立てる。そのまま鍛造を再開する黒ずくめの男に、^{ツバキ}椿はやれやれと首を振った。

「興味なしか。お主は相変わらず『異端』の道を進むのだな。まあ、好きにしろとしか手前には言えんが。」

だが、遠征には共に来て貰うぞ。【ロキ・ファミリア】からの要請だ。『火薬庫』と呼ばれるその所以、存分に發揮して貰いたい』と、フィンの奴が言っておったぞ」

「……」

「む、何だ？ 指なんぞ指しおつて」

小人族バルツムの勇者の声真似をする椿ツバキに構わず、「火薬庫」は槌を置いて指を差す。指先にいた椿ツバキは右へ左へ視線を投げ、背後にある大きな木箱に気がついた。

「ああ、これが。どれどれ……成程のう、まゝた摩訶不思議な武器ものを造りおつたな。

よし！ こいつは手前が持つていつてやろう！ どうせ「ロキ・ファミリア」に渡すのだろう？ ならば手前が先に見ても何の問題もあるまい！

……なんじやその目は。安心せい、責任を持つて届けてやるわ」

ジトーツと視線を向ける「火薬庫」に手を振つて、棺桶ほどの大きさの木箱ツバキを椿は肩に担いだ。「火薬庫」は再び槌を取り、鍛造作業に戻る。

「……なあ、「火薬庫」。お主はまだ、あれを求めておるのか？」

そんな、鉄と向き合う男の背に、椿ツバキは静かに呟いた。囁きに近い言葉は確かに「火薬庫」に届いた筈だが、男は槌を振るい続けるだけだった。

その姿に、隻眼の女鍛冶は炎のような緋色の眼を閉じ。焼け果てた工房の外へ足を踏み出した。

「——やはりお主は、「異端者」よ。誰のためでもなく、ただ己のために武器を打つ。本当はそうではない癖に、いたずらに鍛冶を啄つばみおつて——まるで『鴉』よな」

「……」

「戯言だ、忘れてくれ。邪魔したな」

言い捨てて、今度こそ椿は工房を後にする。残された“火薬庫”は、何の感慨も受けた様子を見せず、ただ槌を振るい続けるのだった。

『オオオツ!!』

それが、『ゴライアス』の上げた最後の咆哮だった。

引き絞られた腕、高速で駆動し歯車を掻き鳴らす機構。常識を遥かに超える巨大な『杭』が、『ゴライアス』の胸部に狙いを定める。

そして、瞬間——大爆発。複雑怪奇な機構に散りばめられた極小の魔剣が反応し、連鎖起動した機構を巡る莫大なエネルギーが全て『杭』に集中する。

『不壊属性』を付与された最高精製金属製の『杭』は、変わらず『ゴライアス』の胸を刺し穿った。否——突き穿ち、内側から爆散させた。

『ゴライアス』。ダンジョン中層の『階層主』。他のモンスターと一線を画す『迷宮の孤王』たる巨人のモンスター。

その巨人が、上半身を失っていた。ドスンドスンと重い音を立てて落ちた両腕が、崩

れ落ちた下半身が間を置かず灰と化していく。

——やがて灰の山となった『ゴライアス』の残骸の上に、その男は立っていた。黒ずくめの外套を靡かせ、殺人的な目つきで前方を睨む『火薬庫』。その右手に装着された、大の大人ほどもある巨大機構——『パイルハンマー』から、砕け散った魔剣と薬莖が排出される。

「すげえ……」

「『ゴライアス』が、一撃……!?!」

「信じられない……」

「噂には聞いていた『火薬庫』の武器……こんなによいなんて……!?!」

「あれが、『火薬庫』っすか……」

口々に声を上げる「ロキ・ファミリア」を背に、『火薬庫』は腰にくくりつけた金属の塊を手にし、『パイルハンマー』に装填する。ガギンツ!! と重厚な金属音が、戦いの終焉を告げる鐘のように鳴り響いた。

「……」

ザツザツと灰を踏み締めて隊列に戻る『火薬庫』。道筋にいる「ロキ・ファミリア」の面々は慌てて道を開ける。

その先には諦め切った顔で苦笑する「ヘファイストス・ファミリア」の上級鍛冶師の

面々と、ぶるぶると俯いて震える椿ツバキの姿があり。

「こつ、このお——馬鹿者ばかもんがああああああああああああああつ!!」

爆発した椿ツバキの手が、スパーンツ!! と「火薬庫」の頭を叩いた。

「何を勝手な事をやっておるんじやお主は!!」『ゴライアス』は【経験値エクセリア】を積ませるために平団員に任せるとフィンの奴が散々言っておつただろうが! それを接敵と同時に飛び出して仕留めてしまいおつて!? どう話をつけるつもりだお主は!!」

「——」

「何? 手前が本来持つてくるつもりだった武器を勝手に持つていくのが悪い? おかげで新しく作った武器バイルハンマーの試し撃ちをしなければならなくなった、じやと!!」

かーっ!! この期ごに及んで手前に責任転嫁するか! なんて奴だこのすつとこどつこい! 「異端者」! 凝り性! 武器とも呼べん馬鹿武器造りめ!!」

「……あー、椿ツバキ? そろそろいいかな?」

スパーンスパーンといい音を立てて「火薬庫」を叩き続ける椿ツバキに、フィンが声を掛けた。それに気付いた椿ツバキは「火薬庫」の頭を地面に叩きつけ、ついでに自分の頭も地面につける。

極東の最上級の謝罪表現——土下座である。

「すまんフィン! この馬鹿にはよおーく言つて聞かせる故、此度の失態は見逃してく

れ！ なんならこやつ分の遠征報酬はなしで良い！ くれてやったこやつ武器の支払いもゼロで良い！ だから手前らに責任をおつかぶせるのは勘弁してくれ!!」

「いや、そこまで譲歩しなくてもいいよ、椿ツバキ。何となくそんな気はしていたからね」

「ただ、次は無しにして欲しいかな？」と「ヘファイストス・ファミリア」団長として謝っているように責任を全力回避する椿ツバキに、フィンフィンは苦笑いを浮かべて釘を差した。それに感謝する椿ツバキの隣で、頭が地面に埋まった「火薬庫」は沈黙したままだった。

「ああ？」「火薬庫」だあ？ あんなイカレ野郎がどーしたっての。フザケた武器を造りやがる、そんだけの鍛冶師だろーが。

……「火薬庫」が強え、だと？ ハッ、それが何になる？ あのイカレ野郎はそんな事ことあ眼中にねえ。なんならお得意の鍛冶だつてどうでもいいんだろーぜ。あの眼を見ただろ？ 獣を見る狩人の眼だ。俺だろーが誰だろーが同じ眼で見やがつて……クソが！ 胸糞わり悪い野郎だぜ！」

怒りを吠え、ベートは吐き捨てた。灰毛を逆立てる狼ウエアウルフ人の男は、止まぬ怒りに燃えていた。

「えっ、「火薬庫」？ うーんと、すっごい武器使ってるよね！ ガガガ、ゴゴゴ、ドッ

カーン!! っって感じでさ! 私の^{ウルガ}大双刃よりおつきいのもあるし、すっごい派手だし! 時々いいなーって思うもん。今度何か注文してみよっかな?

性格? 話した事ないから分かんないや!」

テイオナは快活に笑ってそう言った。大双刃^{ウルガ}を握るアマゾネスの少女は、
「火薬庫」より道中で目撃したある『冒険』に夢中であるようだった。

「火薬庫」? さあ、私は噂以上の事は何も知らないわね。
「火薬庫」って、そもそもあまり表に出てこないし。……そういえば風の噂で聞いたんだけど、あいつって団長よりも古株だそうよ? かなり昔からオラリオにいたらしいわ。だからどうした、っって話だけ」

テイオナはあまり興味がなさそうだった。とある部分が妹と大層違うアマゾネスの女傑は、フィンに呼ばれると目をハートにして物凄いスピードで走り去っていった。

「火薬庫」のう。実は儂はあやつ^の武器を一度買った事があるんじやが、散々じやつたぞ? デカいわ嵩張るわ、扱い辛いわ、機構が複雑過ぎて手入れが欠かせんわで大変じやつたわい。ま、それを帳消しにするぐらいの火力はあるんじやがのう。あの時は儂もまだ青かつたもんじやから、使った瞬間腕がへし折れたわい。片腕だけで済まなかつたらどうなっておつた事やら……」

ガレスは懐かしそうに話した。目を細めて髭をさするドワーフの大戦士は、そのまま

長い昔話を始めたのでそそくさと後にした。

「『火薬庫』、か。あの男は、一言で言えば『謎』だ。誰も出身を知らない上、いつ頃からオラリオにいたかも分からない。分かっているのは人間である事と、扱う武器の凄まじさか。私も含め、あの覆面の下の顔すらほとんどの者は知らんだろう。

……まさかとは思うが、憧れているのか？ やめておけ、あの男のようになるのは私が許さんぞ」

リヴェリアはスツと目を細めてこちらを見つめてきた。ハイエルフの王女は、どうやら話を聞き回っているのを耳にしているらしい、話が長くなる前に逃げ出した。

「シー、『火薬庫』ね。彼がどういう人間なのかは、正直僕も測りかねているかな。一つ言えるのは、彼は僕らとは違う場所を見ている。そこを目指しているかどうかは知らないけれど、それを僕らが理解する必要はないし、する意味もないだろう。

彼は武器を打ち、僕らは武器を買う。言ってしまったら、それだけの関係なんだ。今回の遠征に同行しているのも椿ツバキの功績が大きい。

だから、注意しておくよ。あまり彼に近づくべきじゃない。『火薬庫』は冒険者でもなければ——きつと鍛冶師でもないからね」

フィンは真剣味を帯びた眼差しで諭すように言った。小人族バルクムの勇者は、その聡明さで『火薬庫』という男を臆気に掴んでいるようだった。

カアン、カアンと音が響く。安全階層セーフティポイントに設けられた野営地の一角で、“火薬庫”は鍛冶を続けている。

天幕も張らず、野晒しのままでひたすら槌を振る男の背後に、人間の少女ヒューマン——アイズは姿を現した。

「……」

「……」

双方、言葉はない。元より口下手のアイズと、話すという行為をほとんどしない“火薬庫”。どちらとも口火を切らない状況で、槌の旋律だけが吹き抜けていく。

「……あの」

「……」

しばらく経って、ようやくアイズが口を開いた。しかし“火薬庫”は反応しない。鉄を打ち続ける背に、アイズはもう一度声を出す。

「あの……」

「……」

「……——どうして貴方は、そんなに強いんですか？」

戻らない反応にしびれを切らして、アイズはついに思っている事を言葉にした。途端、ピタリと“火薬庫”の腕が止まり、槌の旋律が途切れる。

静まり返った空間。風の音だけが通り抜ける中、不意に「火薬庫」は動いた。

「!？」

首だけを捻じ曲げる黒ずくめの男。顔を覆う覆面の奥から、鋭いという言葉を飛び越した眼光がアイズに突き刺さる。

それでアイズは、悟ってしまった。蕩けて歪んだ「火薬庫」の瞳孔。そこにあるのは人やそれに準ずる思考ではない。

「火薬庫」のしているものは、自分とは決定的に違う。それを知ったアイズは俯き、その場を後にする。

それでも少女は、知りたかった。

「火薬庫」と呼ばれる男の、その強さを。

冒険者達が倒れている。

地に伏し、顔を擡もたげる事しか出来ない彼らの睨む先には、周囲に散った魔力を吸収する『穢れた精霊』の姿がある。

モンスターにあらざる力、長文詠唱による精霊由来の魔法を放たれば、今度こそ全

滅するだろう。その諦念が、絶望が、冒険者たちに降りかかる。

その時。立ち上がり、希望を示したのはフィンだった。勇気を鼓舞し、立ち向かう意志の力を燃え上がらせたのは、小人族バルウムの勇者だった。

狼ウエアルフ人の男が立ち上がり、アマゾネスの姉妹が武器を構え、エルフの少女が、**【剣姫けんき】**が意志を取り戻す。彼らが精霊に挑む傍ら、生意気な小人族バルウムに挑発されたドワーフの戦士が、ハイエルフの王女が不屈を示す。

「……いいものを見た。手前も一助となろう」

椿ツバキもまた、右眼を細め、武器を取って立ち上がった。Lv.5レベルの最上級鍛冶師マスタースミス、**【単眼の巨師キョクソロブス】**は、ふと己の背後に目をやり、笑う。

「お主の顔を見るのも久々だな。相変わらず不景気な面をしておる」

緋色の視線の先で、「火薬庫」が立ち上がっていた。フィンに鼓舞されるまでもなく、己の意志を再燃させた黒ずくめの男は、始まりから背負っていた剣に手を掛ける。

剣が引き抜かれ、鞘代わりの包帯が解けていく。現れしは、刀身に緻密な刻印の施された大剣。逆立つ灰色の髪髪の男はそれを天に掲げ——空中に何処からともなく現れた『光の小人』が踊り、青い月の光が刀身に集まっていく。

それは「火薬庫」がかつて眼にし、ついに得られなかった『導き』。鮮明に刻まれた記憶を追い、ひたすらに求め続けた最新の『模倣』。

ただそう見えるだけの錯覚である『光の小人』が大剣に集い、暗い光波が刃を成す。それは何処か宇宙の深淵に似た暗闇の陥穽かんせいを宿しながら、純粹にそれを求め続ける人の輝きがあつた。

「ようやく抜いたか。全くうつけめ、お主は何時も傷つかねば正気に還らん。ほとほと面倒な奴よ。だが抜いたからには、あれを狩るつもりなのだろう？」

——狩りはお主の本領、あのような獣にも劣る存在なぞ、それこそお主の領分だろうて。

なあ、“火薬庫”。いや——

——【聖剣】のルドウイークよ」

椿ツバキが笑う先で、ルドウイークと呼ばれた男は剣を両手で持ち、眼前に構える。

青い月光に照らされる左眼が、遠く微笑む『穢れた精霊』を睨んでいた。

“火薬庫”、あるいは「聖剣」のルドウイーク

オラリオに現存する二人のLv.7の一人。黒竜討伐失敗以降、オツタルが台頭するまでオラリオの「頂天」にあつた鍛冶師。

その正体はかつて狩人の悪夢に囚われた、名も忘れ去られた古狩人の一人。血に酔い、悪夢に囚われ、獣を狩り続けるのみだった男はある時、獣に墜ちた英雄の成れ果てと相見える。

男は挑み、戦い、悪夢の中で永遠の狩りに囚われながら、ついに英雄の正気を取り戻し、密かなる月光の輝きを眼にした。だが男は英雄に敗れ、英雄は一人の狩人に討たれ、月光は持ち去られた。

残ったのは、男の執念。悪夢に囚われた男は、月光の輝きこそ導きを見出し、それを得ようと足掻いた。“火薬庫”の源流、オト工房の粋を盗み、工房の業を我がものとした。そして自らこそが月光を継ぐ者だと、天の月に手を伸ばした。

凡人に有り触れた、自らをこそ特別と思う錯覚。男はそれを求め、何時しか狩人の悪夢から解放されてもなお、求め続けた。

夢から覚め、男は墜ちた。墜ちた先は上位存在の見守りし穴を穿たれた世界だった。

男は蕩けた瞳のまま、求めるものを愚直に追い続けた。

【聖劍】のルドウイーク。どちらも男が名乗ったものではない。二つ名は神が、そしてルドウイークは男の聖劍さくひんに刻まれた古い文字より名付けられた。

男はかつて見えた英雄のように、傷つき倒れた時のみ正気を取り戻す。そして初めて聖劍を抜き、己がルドウイークの後継だと信ずるのだ。

それがただの仮初と知ってなお。狩りの中でならば、心委ねられるが故に。

という夢を【狩人】は見た。

黎明か夕暮れかも分からぬ月と太陽の狭間。教会の尖塔にぶらさがって寝ていた【狩人】は突如覚醒し、有り得べからざる動きで跳ね起きる。

そうだ、俺は「火薬庫」だ。誰が何と言おうと「火薬庫」なんだ。長い長い睡眠で程よく蕩けた「狩人」の頭は夢の内容で一杯だった。

【狩人】は走った。目玉の広がる道を踏み潰して駆け、臓物の巡る建築物の間を抜け、屹立する名状し難い巨塔に突入し、下へ下へ突き進んだ。

モンスターも冒険者も関係なく蹴散らして突進する【狩人】。左手に《月光の聖剣》を持ち、さながら聖杯ダンジョンで遭遇した古い人の女の如く手足をバタバタとばたつかせ疾走する【狩人】は、神々が見れば「貞子!?!」「貞子だ……」と戦慄した事だろう。

【狩人】は七日七晩走り続け、59階層へ到達した。ここでは平べったい胸部の上位者が率いる獣共が獣とも呼べぬなにかしかと戦っている筈だ。

そこへ颯爽と現れ、宣言するのだ。我こそは「聖剣」のルドウィークである！と。しかして、59階層の階段を降り切った【狩人】が眼にしたのは。ひたすらに寒い、いたるところに氷河の流れる凍結の世界だった。

「……」

当然である。【狩人】の耳にした情報はもう何ヶ月も前の話だ。

夢見た夢のままに行動した【狩人】は夢から覚め、そして全てを夢にするべく『狩人の徴』を使うのであった。